

「共同体的性格」の濃いものと淡いものがあるとは言えようが、その場合にも共同体の規定を下した上でないと無意味であろう。しかも古代に近づくほど、史料の乏しさからそうした性格づけは下しにくいであろう。いずれにしても村落構造の研究が未発達なため、論理的前提にひかれやすい現状であるから、その手続をばぶいてはならないと思う。

なおごく小さなことであるが、二二頁の「古事記」は「日本書紀」の誤、一六六頁の「所令隨身於山野」の返り点も誤と思われ、一九七頁の「村人（むらうと・もうと・もうと）」のもうとについては説明がないと納得しがたい。これらはほんの例外であり、全体にわたり円熟した表現に満ちており、きわめて論旨明快である。もとより浅学のわたくし如きものの批判の限りではないのであるが、編集部より求められるままに、僭越をおそれつつ記した。著者ならびに一般読者の寛恕をお願いする次第である。

(A5判 三〇〇頁 昭和四十一年十月 角川書店刊 定価一八〇〇円)
(明治大学教授)

日本宗教史研究会 編

日本宗教史研究

I 組織と伝道

II 布教者と民衆との対話

古田 武彦

昨年より相次いで刊行された両著（後述ではI・IIと記す）は、広大な日本宗教史の各領域に対して加えられた、二十六人の斬新な攻究をおさめたものである。

ともに二百ページ余の、まとまった体裁ながら、「論、古今東西に及ぶ」研究対象をもつ、このような著述は、平常中世思想史の一角に踞踏している、わたしのような研究者の書評能力をはるかに越えているというほかはない。けれども、わたしがこの両著を読み終えてのち、一種爽快なイメージにつつまれて、脳裏におびただしい研究意欲上の刺戟を残されたのは、なぜであろうか。

おもうに、この種の編著のおちいりやすい陥穽たる、エンサイクロペディア風の無味乾燥さと、これは無縁である。しかも、これは単なる「羅列された論文集」ではない。各研究者が得意の領域についてのびのびと語り、日本宗教史の座標上の自己の地点に立って、そこから望見し得る史的イメージを明かしているからである。

してみれば、狹隘の地点に歩をとどめていたわたしのような研究者が、各領域の開鑿点とそこから開かれた風穴に面して、心涼しい境地を感ずるのも不思議ではあるまい。

それ故、井底の蛙評たる嘲りを覚悟しつつ、わたしは両著より学び得たもの、疑問となし得たものを、次のような七箇の視点より提示してみたいと思う。

二

何よりもわたしが両著から感銘をうけたのは、研究者各個の「醒めた目」であった。

およそ史的研究である以上、各宗派のあまりにも「宗義内のな」視点から研究がなされる時は、*「宗派主観」*が学的客観性を蚕食する。これはおよそ自明の道理である。しかし、明治以降の「近代史学」は必ずしもこれに潔癖であり得なかつた。わたしたちが明治百年の「大家」の業績を注視する時、出身宗派、宗義の影がしばしば研究内実をおかしているのを認めざるを得ないのである。この点、昭和生れの研究者を主体とする、この両著においては面目を異にする。

例を藤岡大拙氏の禅宗の地方伝播とその受容層について——室町前期を中心に——(一)に見よう。傑僧と言われた拔隊得勝が幾多の民衆集団を集めながら、それを次々に捨てて武田信成の外護の懐に落ち着いた事蹟をとらえ、「彼の民衆接化運動は、よりよき外護者を求めてのPR」だったのではないか、と言っておられる。人はあまりにもシニカルな、氏の言に驚くであろう。けれども、このような氏の視角は一介の思いつきではない。室町期の禅

院が「東班衆」と呼ばれる金融僧を有し、これが一方では金融利倍の高利貸しとして民衆の怨嗟を買ひ、他方では室町幕府の財政の一端をささえていた事実を、氏は正確に分析される。(「禅院内に於ける東班衆について——特に室町幕府の財政と関連して——」『日本歴史』一四五)さらに、古来名僧の名の高い蘭溪道隆・元庵普寧・無学祖元が権力者北条時頼に対し、「菩薩」「再来之仏」「如来使」といった最大限の美辭を交々奉っている事実を指摘し、外護者への「卑屈な阿臾」と断ぜられていく。(「禅宗の日本的展開」『仏教史学』七の三)また、禅家に有名な「公案問答」についても、きわめて「没論理的」であり、このようにして民衆の理解を拒絶した上で、「檀那の延命息災のために祈禱」を行ったのだ、と説かれる。明治以降、鈴木大拙氏によって唱導されてきた、流麗高雅なる禪解説とは全く異った視点がここにある。そのいずれが正しいとは、今は問うまい。ただ昭和生れの太田氏がはるかに「醒めた目」で史料を見つめている、という事実をわたしは疑うことができない。

この点、中尾義氏の歯切れのよい論文「中世日蓮宗における組織と伝道」(一)「仏教の庶民化と葬祭」(二)も、同質の特徴をもっている。前者においては、下総国千田庄の東禅寺を舞台とする戒律・華嚴の学僧湛審の悲劇が分析されている。建武の動乱によって最大の外護者金沢氏を失った湛審は、新興の武士のために「祈禱」の精誠を誓うほかなかったという。

これに交替して新しく進出してきたのが日蓮宗の中山法華経寺である。新興の在地最高権力者たる千葉胤貞の氏寺となり、「家の宗教」としての地位を築く。そして、その支配権を背景として、

在地の被支配者に対する「基底部までの」総体的把握を千葉氏のために用意し得たのだと述べておられる。ここには「日蓮宗」という新しいイデオロギーが武士たちのために、どのような現実の役割を果たしたのかという設問に対する、リアルな解答が与えられている。このような氏の視点は「日蓮宗と葬祭」(『歴史教育』一九六七・八)「日本仏教の地域発展——日蓮宗」(『仏教史学』九一三・四)等にも一貫している。

この点、とくにわたしたちを瞠目せしめる業績を展開しておられるのは大浜徹也氏である。キリスト者と民衆の確執——明治前期のキリスト教伝道をめぐって——(Ⅱ)をはじめ、「明治前期西上州における基督教の形成」(『史潮』八二・八三)「基督教伝道の展開をめぐる防禦と抗争」(『地方史研究』七七)「明治前期における基督教の存在形態」(『日本歴史』二二二・二三三)等において、氏は教会史料の分析を精力的に遂行される。教会史上、模範とされた、独立自給教会たる安中教会(群馬県)の場合、その財政の中核は地方ブルジョワ湯浅家の出資に依存していたという事実、そのため教会は湯浅家のサロンの性格をもっていたことが指摘される。これに反し、このような外護者をもたぬ甘楽教会の場合、金銭問題のもつれのために、牧師と信徒の間に「ぬぐいようのない相互不信」が生れた。そしてこのような一般的な事情が、外国からのミッションの援助を「神より受くる金」として正当化するという「悲しき理窟」を産み出したという。氏は一方では、本願寺等の、教会外部からの村八分的圧迫の実態を論証されると共に、反面、日本のキリスト教会の内面をむしばむ偽善の体質を鋭くえぐられる。それが客観的な史料と「醒めた目」に基いている

限り、わたしたちを深く首肯させる力をもっているのである。同じ意味で、池田英俊氏の明治における在家仏教運動——特に恩と戒との実践をめぐる(Ⅱ)も、明治十～二十年代の仏教者、大内青巒と鳥尾得庵の思想内実を摘抉した好篇であるが、さらにより十分な論旨の展開が望まれる。

三

両著の強みは、地域別・宗派別・時代別の多彩な個別研究の拡がりを俯瞰せしめることであろう。

たとえば、松山善昭氏の近世東北における新仏教の伝播と教団形成——曹洞宗と真宗を中心として——(Ⅰ)の場合を見よう。氏の論証の裏付けをなしているのは、「現存寺院分布」をはじめとする東北地方の実地調査による各種統計である。これは「東北地方における真宗教団成立の特殊性」(『文化』一八・三)「東北地方における曹洞宗教団成立の特殊性」(『日本仏教』一〇)より、名稿「東北地方における天台教団成立の特殊性」(『日本文化研究所研究報告』別号、金倉円照氏との共筆)にいたるまで、營々と積み重ねられた成果の上に立っている。このような氏の研究の深化のために、今些少の疑問を呈させていたごう。氏の場合、「本末関係」「寺格」「独頭」の問題は、近世的封建的関係の具体的分析の中では、ほぼ類同的な視点で処理せられているように見える。ところが、かつて児玉識氏が「本願寺絶対主義教権確立の前提——本末制度と寺格の関係を中心に——」(『字部工専研究報告』四)の中で立証せられたように、今日「封建的」なものとして映ずる「寺格」が実は「本末制度」に対する否定的契機をもって登場し

たという、長州の場合の「特殊性」の報告がある。また本著(一)内でも、千葉兼隆氏が真宗教団の組織において、「顔頭制」をもって、「本末制解体の主要原因の一つ」として指摘しておられる。これは氏が「近世真宗教団の本末構造」(『近世仏教』二)以来、豊富な史料踏査をもとに提出しつづけてこられた、魅力あるテーマである。まことに今日の視角からは、単に類同視される諸概念の興隆衰退の中にこそ、まさに史の変動の力学が秘められているのである。この点、松山氏が右のような問題視角より、東北の「特殊性」を一段とダイナミックに明らかにされる日を期待したい。

また、氏の研究において注目せられるのは、「寺伝」「縁起」類の蒐集とその史料としての使用である。明治以降の「近代史学」においては、寺伝・縁起類を「史実」より峻別し、これを軽視する風潮を生じた。けれども、「寺伝・縁起」自体、それを産出した母体とその時代を語る「史料」に他ならぬ。この点、厳密に言って、奈良・平安期の金石文と本質を異にするものではない。一歩を進めれば、「古事記・日本書紀」もまた、皇室の「縁起」にほかならぬであろう。このようにしてみると、尨大に存在する寺伝・縁起類は中近世思想史上の史料の豊庫である。それらの反復性・類同性は、それだけその産出時代の精神構造に深く密着していることを証するに過ぎぬ。それ故、松山氏が「東北地域寺院調査要覧(一)——山形篇」(『東北関係・文献資料目録』第四集)に示されたような基礎作業が一段と発展することが必要である。

わたしたち他分野の研究者にとって、貴重な収蔵となったのは、和多昭夫氏の中世高野山教団の組織と伝道(一)である。中世史以降の思想史の各分野にとって重大な影響力をもつ中世真言という、

従来研究の必ずしも多からぬ地点について、今回氏によって要を得た概観が与えられたのは幸であった。近來、「密教」が日本宗教史にとって占める意味の重大性についての認識が深化しつつあるだけに、この分野の教理史的思想史的研究の輩出が望まれよう。宗派的に異色なのは、瀬戸美喜雄氏の金光教研究である。近代における宗教者と民衆との対話——川手文治郎の場合(Ⅱ)「金光教とキリスト教の比較研究——教祖論についての序説——」(『金光教学』五)「教祖の信心の基本的特性——現実生活との関係を中心として——」(『金光教学』七)等、氏の論究は各方面にわたるところがあるが、先の中尾氏の研究に見えた如く、その宗教の現実の役割がその時代の民衆にとって一体何であったか、という視点からのリアルな分析が望まれる。

この項目の最後に、時代別研究の好篇として圭室文雄氏の論文「葬祭から祈禱へ——近世仏教における対話内容の変化(Ⅱ)」をあげようと思う。氏は慶長—寛永期と寛永末年以降寛文期との二つの時期を分つ。前者では「葬祭」を中心として寺院と檀家との対話が行われたのに対し、後者では「祈禱」へと寺院の檀家獲得の方向が移行した、と明快に論述される。注目すべきは、幕府が「葬祭」中心の寺請寺院を強制したのに対し、農民はあくまで「祈禱」へ向って固執していった、と言われている点である。わたしたちは「祈禱」をもって、一律に非近代的・阿片的性格の存在と見なしやすいが、先に藤岡・中尾氏によって指摘されたような、外護者のための祈禱とはまた異った役割をもつ祈禱、いわば権力者に忌避される「民衆にとっての祈禱」が論証・描出されている。氏がこのような興味深い問題に当面せられたのは、か

って氏が「寛文年間水戸藩廢仏毀釈について——開基帳の検討を中心として——」(『近世仏教』九・一〇)に示されたような、数理的・統計学的な処理を軸とする史的研究法の成果に負う所多いものと思われる。氏の鋭い意識による今後の研究に注目したい。

四

わたしたちは両著のいわば基底部をなすような「研究思想」を、竹田聰洲氏の日本宗教史を貫く素質について(Ⅰ)という一篇の中に見出し得る。

氏によれば、一個の宗教的天才の創造した思想の各個研究は、日本宗教史研究の一面に過ぎぬ。問題はそれが「日本の社会」の構造の中に「まぎ込まれる」ことによって、「歴史化」する点である。そのような「日本の社会」の基本体質として、「家」と「呪術性」が存在するという。

このような竹田氏の提唱に接する時、わたしは氏の名篇「或る無名村落寺院の境内仏堂とその前生」(『仏教史学』六一二)の一節を想起せざるを得ない。「一方において鎮守・神を産んだ氏子の村落協同体は、又同時に菩提寺・旦那寺を護持した檀家・門徒の村落協同体であることは、この上なく明瞭な事実であるという以上に、之は又日本の宗教史にこれまで未掘のまま放置されて来た極めて大きな鉱脈であるというを憚らない。」このような氏の自負にたがわず、丹波の無量寺という渺たる無名寺院の歴史的分析より、日本の社会の中における宗教の在り方、という巨大な金鉱脈を掘り当てられたのであった。

評
高取正男氏の奈良・平安初期における官寺の教団と民間仏教

(Ⅰ)も、おそらく右のような系列に属する、成熟した一篇である。日本靈異記に対し、柔軟な分析法を駆使しつつ、その基層に存する在地土着の信仰をじっくりと発掘される氏の手法は、「古代民衆の宗教」(『日本宗教史講座』2)より近著『宗教以前』(NHKブックス)にいたるまで、すでに香り高い熟成の日々を経ている。

この点、さらに若い層に属する研究者たる伊藤唯真氏の念仏と神祇信仰——中世浄土宗の布教課題として見たる(Ⅱ)や池上尊義氏の日蓮にみる布教者と民衆との対話——その現世利益的信仰を中心として(Ⅲ)も、教祖の教理が「歴史化」されるための道筋を明かそうとしているものといえよう。伊藤氏の「社頭聖」の研究(『中世の社頭聖について』『仏教大学研究紀要』四七)や池上氏の「供僧」の研究(『供僧考』『東海大学紀要』七)は、真宗史における山田文昭氏の「堂僧」の研究のごとく、教祖と民衆との間の結節点を解こうとされたものである。

このような諸氏の研究業績は、いわば先の竹田氏による「作業仮説」の妥当性を立証するものと言えよう。

しかしながら、反面、両著の研究業績自体がこの竹田仮説をさらに発展的に止揚する道筋を示唆しているように思われる。何となれば、中尾・非室両氏の研究にも示されているように、十四世紀の千葉氏にとつての呪術性と十七世紀の農民にとつての呪術性とは歴史の位相を全く異にしている。前者は千葉家による在地支配の永続のための呪術であり、後者は権力者の寺請寺院を通じての家把握に対する、一種の抵抗としての呪術である。この両者に対して、形式的には「呪術性」の一貫と称し得ようが、現実の機

能においては烈しい断絶をもっているのである。

他の局面を見よう。竹田氏の言われる「宗教的天才」とは、果してそれほど「日本の社会」から「孤立」していたのであろうか。たとえば、天才が「神祇不拜」を高唱し得たのは、その背景にそれを待望し、欲求する「日本の民衆」が実在していたからではあるまいか。親鸞は消息の中で、しばしば諸神軽侮のふるまいについて、門弟・信徒をいましめてゐる。このことはすなわち、十三世紀の民衆が時として「教祖」以上に急進的な要因をほらんでいたことを立証するものである。換言すれば、革命的な時代の要求なしに、革命的な天才は創出され得ないのである。このように思惟しきたれば、「個人」の歴史化としての「時代」という命題は、「時代」の歴史化としての「個人」という命題と切り離せぬ、相補的な原理である。今後、一層前進せしめられた方法論的立脚地より、日本宗教史の立体構造が明らかにされることを望みたい。

五

次に、体制や階層との関連を視点として考究せられた論作を見よう。

周知のように二葉憲香氏は『日本古代仏教思想史の研究』において、律令仏教対反律令仏教という壮大なスケールの分析を展開せられた。今回の古代における宗教的实践——行基と空也——(Ⅱ)はその一部、圧縮の鏡をなしている。氏は行基・空也を「狂的エクスタシヤ」や「呪術性」から切り離れた地点においてとらえようとして、史料批判をすすめておられる。この場合、行基・空也を産出した「日本の社会」の民衆的基盤はどのようなものであろう

か。また、当代における「エクスタシヤ」や「呪術性」は、律令仏教の側におかれるべき、体制的なイデオロギーなのであろうか。この点、同じ問題を逆に「密教的基盤」から解明しようとされたのが速水権氏の空也出現をめぐる諸問題(Ⅰ)である。氏はその基盤において、一方では貴族への、他方では民衆への、共通の通路が開かれていたのではないかと断言しておられる。史料の限界上、困難な問題ながら、今後の論争の進展を望みたい。

次に柏原祐泉氏の近代における庶民の仏教受容——妙好人浅原才市の姿勢——(Ⅱ)は、歴大な信仰告白のノートから、才市の思惟様式をティピカルに抽出されたものである。そして、「天子・門跡・仏」を三位一体視する才市の思考方法が徹頭徹尾「体制順応」的であったことを明白にしておられる。濃厚な筆致の中に、才市の急所をキラリと描破された好篇であろう。

六

理論的な立脚地を深く浮彫りにした諸篇が存する。

先ず、大隅和雄氏の聖の宗教活動——組織と伝道の視点から——(Ⅰ)がある。氏にはすでに「遁世について」(『北大文学部紀要』一三〇)「古代末期における価値観の変動」(同右一六〇)がある。前者は「遁世」の意義の変遷の中に時代的思想的変移の相を辿ったものであり、後者は平安期における、史書をはじめとする書物編纂方法の変化の中に知識人貴族層の価値観の崩壊過程を描出した力作である。産出物群の様式から、その時代の製作者層の意識課程を復元するという、一種の史的透過術が適確に方法化されているため、そのいずれも手ごたえのある論証の実を結んで

いる。

大隅氏と同種の対象を扱いながら、独特の境地を樹立されたのは桜井好朗氏の『発心集』の思想的地位(Ⅱ)である。氏にはすでに「隠者と戦記——平家物語および太平記の成立に關して——」(『文学』三四・一〇)や単行本「隠者の風貌」がある。とくに後者は社会史と精神史の中間原理としての「生活過程」を追跡するという方法論を建て、如実に隠者群像を抽出するのに成功している。ことに「開かれた隠遁精神」という、氏独自の設定概念の上に、個性的な平家物語論・太平記論を展開された。

北西弘氏は真宗教団における『知識』と伝道——十六世紀の変貌期を中心として——(Ⅰ)の中で、二葉憲香氏の蓮如観を反措定としつつ、次のように親鸞と蓮如の關係を論理的に規定せんとされた。すなわち、親鸞が「個我」の立場に徹し得たのに対し、蓮如は歴大な教団を背景とした「普遍我」の立場に立たざるを得ぬ時期に生きた。従って、一見両者の差異と見えるものは、それぞれの「教団の変質」に対応したものである。畢竟して、同じ、眞實が、二人の生きた時期の異なるに従って、単なる「表現の差」を生んでいるにすぎない、と主張されるのである。

一向一揆の一連の研究をはじめ、意欲的な理論探究を行っておられる北西氏であるだけに、真宗史学上、一箇の「典型」としての見解を示されたものと言ひ得よう。確かに、親鸞の求めたものが「阿弥陀仏に対する専一な帰依」にはかならぬ限り、蓮如はそれを壮大なスケールにおいて、民衆集団の共同の信仰に化し得たのであるから、死せる親鸞の本懐を遂げたものと称して、一点の過謬もない。このように、真宗史内においては至極至当なる

景観は、一旦真宗史外の地点から透視する時、いささか相貌を異にするであらう。

すなわち、体制からの疎外と訴追の中にあつた親鸞集団は、蓮如においては体制内へと移行し、眞の意味で「教団の変質」が生じた。従って、両者の間に「南無阿弥陀仏」という「表現の同一」は共有されていても、それぞれの時代にとって、それぞれの民衆にとつて、眞にそれが意味し得たものは変貌したのである。このような視野に立ち出れば、「表現の差異」論にとどまることはいささか困難な事態とならう。この点、ひらかれた展望の中で、理論上の論究がさらに進められることが期待されよう。

七

両著において、わたしたちに清冽な印象を与えるのは、昭和十一年代生れの研究者の各論である。

大桑齊氏の厭離穢土から欣求浄土へ——恵空にみる真宗教学の近世的展開——(Ⅱ)は、個人思想研究に手薄い観のある、近世真宗史研究の死角を突いた好篇である。氏は「近世初期真宗寺院の土地経営——能登本誓寺文書に關する覚書——」(『近世仏教』三の二・三)「近世真宗教団の形成——北陸における本末關係を中心として——」(『金沢大学法学部論集』九)「宗門改・寺請と寺檀制度」(『大谷大学研究紀要』四)「東西分派論序説——天正末と文禄期における教団変革の視角から——」(『真宗研究』一二)といった論作をすでに発表しておられるが、今回思想史の分野に登場されたのは心強い。恵空がおびただしい書写本を後世に遺したことは著名であるが、その書写事業の思想的意義を、たとえば大隅氏

のような方法論のもとに、追跡されることも可能であろう。

橋本政良氏の仏教の民間浸透と僧尼令——對話の為の社会的条件——(Ⅱ)は、日本靈異記を中心に切れ味のよい分析を試みておられる。すでに「天武・持統朝の仏教統制」(『史学研究』九六)において、旺盛な研究意欲を示された氏であるだけに、今後の進展と飛躍が期待される。

菅原征子氏の平安末期における布教者と民衆との對話(Ⅱ)は、すでに発表せられた「平安末期における地藏信仰」(『史潮』九六)「古代東国における観音像の造立」(『仏教史学』一三・四)等の論作を背景にした要約的小論である。ことに「地藏信仰」の論究の際に示されたような着実な研究法は、先にあげた速水侑氏の「日本古代社会における弥勒信仰の展開」(『南都仏教』一六)と共に、古代仏教史研究の基礎作業として貴重である。

小栗純子氏の天理教における布教者と民衆との對話(Ⅱ)は、昭和二十年代生れの筆者による、さわやかな小論である。すでに『教祖誕生とその条件——親鸞と中山みき』(『菅原一男氏と共著』)という著作をもっておられるだけに、ここでも氏の健筆はあざやかに中山みきをはじめとする天理教内の諸群像を、くもりなき目で描出し得ている。今後の活躍の望まれる一人である。

八

最後に、両著中もつとも特色あふる一篇を挙げよう。森竜吉氏の一八七九年七月十四日——本願寺教団改革の政治史的意義——(Ⅰ)がそれである。本願寺の正史に属する「明如上人伝」と、野史に属する「革正秘録光尊上人血涙記」と、この二書を鋭く対

決させることにより、明治十年代の本願寺教団近代化挫折の経過がいたましいまでに描破されている。しかも、その革新運動を推進せんとしたのは、若き法主明如その人である。本願寺教団の絶対主義体制が勝利し、革新が敗退する中で、当の法主明如は「唯、魂のぬけた人の如く」その後の生涯を送った、という一段は、ここに読みいたって人をして深く長歎せしむるものがある。服部之総氏の秘蔵の本「血涙記」を遺品としてもらいうけて成ったというこの論文は、死せる明治史学者の遺志が生ける森氏の筆の中によみがえったかの観を与える。けれども、なおこの事件の経済史的政

九

治史的背景について残された課題多く、今後の健筆に期待したい。

以上、冗長の舞文を弄したのであるけれども、これらを通観する時、日本宗教史の諸相、各時代の個性がわたしたちの眼前に如実に浮びあがり来るのを覚えるのである。これは畢竟、執筆の諸氏がいずれも自己の持場を固守しつつ、切実な現代的関心のもとに執筆せられたからであろう。試みに、この渺たる二小冊を、彼の辻善之助氏の大作に比する時、その問題意識において、時代は確実に前進したことをわたしたちは知るのである。寒夜、この書を繙く人々を遠き知己としつつ、今蕪筆を擱かせていただくこととする。

〈両著は日本宗教史研究会編であり、サマーセミナーの成果の上に立っている〉

(A5版 一二四一頁 昭和四二年七月 法蔵館刊 定価一、五〇〇円)

Ⅱ二三五頁 昭和四三年七月 同刊 定価一、五〇〇円)

(京都市立洛陽工業高等学校教諭)